

教育界
キーマン
対談

小学校現場の 「人材育成」 を考える！

創価大学
教職大学院准教授

渡辺 秀貴

前東京都狛江市立狛江
第三小学校校長
前東京都小学校算数
教育研究会理事

株式会社早稲田アカデミー
人材開発部育成課上席専門職

牛嶋 孝輔

数年前から団塊の世代の大量退職そして新任教員の大量採用という状況が続き、現場に入ってくる若者の「教師」という職に就く意識も変わってきています。即戦力として求められる若手教員の育成が、小学校現場の喫緊の課題となってきました。

今回は、数多くの塾講師の育成実績をもち、文部科学省や各地の自治体との協働で、「公教育支援」にも取り組まれている、早稲田アカデミーの牛嶋さんにご登場いただきました。

1 「授業開きを成功させる」ために ～学習に向かう姿勢を整えるには?!～

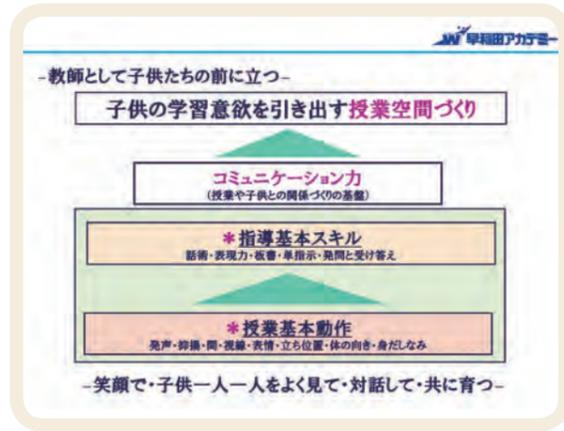
渡辺 今、学校現場で、多忙の中、歯を食いしばって魅力ある授業づくりに取り組んでいる若手教員がたくさんいます。そこで、早稲田アカデミーの新人講師育成での理念や手法の中に、学校現場が参考にできることがあるのではないかと考え、お伺いしたいと思います。授業に対する理念や、授業の「基本動作」と言われるところの、スキルアップの考え方について教えてください。

指導者の本気が、子どもたちに伝わる

牛嶋 早稲田アカデミーの教育理念は、創業以来変わることなく「本気でやる子を育てる」です。

大事なのは技術や手法という小手先のことはありません。先生が本気で向き合うからこそ、子どもたちの本気に火がついて、頭や心の中がアクティブな状態になり、子どもたちの学びに向かう姿勢が整えられるのです。

とにかく先生が、笑顔で堂々と一緒に学んでいこうという気持ちを発信し、それが子どもたちに届きさえすれば、そこから信頼関係が構築できるのではないかとこの考え方が、「本気でやる子を育てる」という理念であり、その考え方をずっと大切にしています。



“入口の研修”で大切なのは、本気の伝え方

牛嶋 本気の示し方は、ベテラン先生の上手な授業を追究して分かってきました。それは、指導の場面に応じて、「発声」「視線」「表情」等を意識して使い分けるのです。加えて子どもたちの学習意欲を高め、対話的な授業を展開するために、子どもたちの学びに向かう姿勢づくりを意識し、「*単指示」を活用して学ぶ姿勢を整えるのです。単指示を出し、見届け、必要に応じて指導し、子どもたちの行動を導くことで、授業に規律が生まれ、教室に一体感が生まれるのです。

*単指示：子どもたちが先生の指示に沿った一つの行動だけをとるような指示。(早稲田アカデミーの定義)

「授業開きを成功させる」ための授業開始3分間

1 笑顔で元気な挨拶をする。

2 号令をかける。

起立
子どもたちに全身が見えるように、教卓の横に立つ。

これらのことをやる意義

“今から授業を始めるよ。”“空気が変わるよ。”という学びの時間への切り替えです。そして教卓まで来たら、モチベーションの上がるような話をします。学校では、これから学習する内容の身近な事象の例示や、学習することでひもとける問題や社会の仕組み等について触れてみてよいでしょう。

早稲田アカデミーでは、号令は、先生が子どもたちをリードして行います。

3 子ども一人ひとりの名前を呼ぶ。

礼
少し間をとって、声を張って強く言う。

気をつけ
胸を張って、背筋を伸ばす。

教卓の横に立ち、全身が見えるようにして、一つ一つの動作をしっかりと行います。学校で子どもが号令をかける場合は、先生が号令の手本となるように行うとよいでしょう。

子ども一人ひとりの目を見ながら、出欠確認を行います。そのときの反応や表情で子どもの状況を読み取ります。そして、“頑張っていこう。”というように思い(先生の本気)を伝えます。それから「ハイ!」の返事を笑顔で受け取ります。このキャッチボールが成立してから授業を始めます。

「授業基本動作」をマスターするには?

牛嶋 まず授業の構えをつくる一連の動作を分解すると、「発声」や「視線と立ち位置」「指示の出し方」になります。これら一つ一つのことは、意味を理解して訓練すると、習熟することができます。しかし、これらをやれると思っ

クロールが泳げるようになる練習方法<例>

1 ばた足(足だけ)

2 手回し(手だけ)

3 息継ぎ

全部できるようになって

すいすいとクロールを泳げる。

牛嶋 上のクロールの例のように、スモールステップで習熟していった、それぞれができるという段階になったら組み合わせ実践するようにします。いくらベテランの先生が模範例を示しても、長年の経験に裏打ちされた行動は、様々な要素を組み合わせ実践されているため、なかなかまねできるものではありません。これは、盗めといっても盗めないことなのです。



2 「学習する空間づくり」で大切なことは？

渡辺 挨拶というのは“人間関係づくりの入口だ。”という社会一般の観念的な意味合いや、ルールとして始める場合も多いですね。でも、その挨拶が人と人とのつながりの根源に関わることだと実感して先生自身が実践していくことで“始めの挨拶でクラスが変わる。”ということにつながっていくのですね。

それでは、授業づくりについての考えをお聞かせください。

授業づくりをする上で、いちばん大切なことは？

牛嶋 授業づくりを考えると、“授業づくりで大切にしているものは何か。”を三択でよく聞かれます。

- 1
安心
- 2
ルール
- 3
楽しさ

いろいろと答え方があり、研修の中で問うと授業規律につながる「ルール」という答えが多く返ってきます。でも、教師として目指していく授業や理想でいくと「楽しさ」ですね。学校の教師になることを目指して教職課程をとっている学生は「安心」と答えます。

学習空間が子どもたちの学びに向かう姿勢として、最初に安心できる環境となっていることが担保されていないと、授業を始めてはならないというのが、私たちが再定義しているところです。

その上で「授業空間づくり」「学習する空間づくり」という言い方で、早稲田アカデミーが創業以来40年以上大切にしてきたのが「学びに向かう姿勢」です。子どもたちに「学びに向かう姿勢をとうろ！」と言ってとれるものではありません。それを先生がどのようにして導くのが大事なことだと思っています。



3 常に「教師」という職を選んだことを振り返る！

牛嶋 話は変わりますが、「教員」と「教師」の違いをどのようにとらえていらっしゃるかお聞かせください。

「教員」と「教師」の違いから考えてみる！

渡辺 教員は「員」と付くから、組織の中の一つの目標に向かって、それを実現するためのメンバーで、“事務的”な印象です。教師は、組織も大事だけれど、自分の人間性をもって教え導く立場であるという教職者に通じる呼称ととらえています。

牛嶋 その通りだと思います。だから、教員養成という言葉は、そうした役割を担う教員をつくる、増産するという位置づけだから、もしかしたら意欲が伴わない印象になってしまうのかもしれない。

では、教員とは違い、教師には何が備わっているのかというと、自分のポリシーをもっているということと、子どもたちがあこがれ、ついていきたいと思う気持ちと、前述の子どもたちを「リスペクト」するという気持ちが相互に通じている存在なのではないかと考えています。敬意をもって子どもたちに接するからこそ、子どもたちから信頼が得られ、意欲を引き出せるのが教師なのだという理想の教師像を目指していくというのはいかがでしょうか。

- 先生になってよかったと思う瞬間はどんなときか。
- 苦しいこともあったけれど、今ここで踏みとどまってよかったと思えるのはなぜか。

こうした問いに、とつとつでもよいから答えられる人をたくさん育てていくことが求められているのではないかと思います。

牛嶋 教育委員会で指導主事経験や小学校で校長経験のある渡辺先生にぜひお聞きしたいのですが、若手教師を育てるにあたり指導にあたる管理職や指導教諭等に求められるのはどのようなことなのでしょうか？

渡辺 教師の仕事の意味づけたり価値づけたりすることだと思います。そのための仕掛けをつくっていかないとはいけません。根源的な問いを若手の先生と指導者で一緒になって追究していくと、それぞれの教育論や教育観を見つめ直すことにもつながるのだと改めて思いました。慌ただしい日々の中でも少しでも対話の時間がもてるかどうかのポイントだと思います。

「目線」という言葉のイメージの共有

子どもを見る「目線」という言葉一つとっても、イメージが違う場合があります。

- ✗ じろっと
子どもたちをガン見
- 両手を広げた範囲を覆うように
視野をとりアイコンタクト



■ 言葉のイメージを先生同士で共有した上で、授業を見合ったり、指摘し合ったりすることが大切です。

授業の基本の“き”

今も昔も変わらない、基本の“き”をおさらいすると、

- 1 子どもたちに分かる言葉で伝え、
- 2 その言葉が子どもたちに届いているかを見取り、
- 3 小さな変化を褒め、
- 4 自尊感情や自己肯定感を育む。



「教育」=辛抱強く待つ、そして引き出す

エデュケーションという言葉は、そもそも教育と訳されていますが、educationの語源はeducareやeducereです。ここには、子どもたちの潜在的な可能性を先生が見取り「引き出す」という意味が込められています。先生の本気で子どもたちの本気を引き出すのです。

子どもたちが、探究や発見しようとしていることは、すぐに成果や効果として表れるとは限りませんが、辛抱強く向き合うことです。そして、ここぞという場面で引き出せるまで待ちます。このことを大切にしていると、やがて子どもたちとの信頼関係が構築できてきたという実感を得られ、授業づくりにも生かせるようになります。

「リスペクト」が通じると学びに向かう姿勢が生まれる

リスペクトには、尊重する、尊敬するという意味がありますが、respectの語源的には、「re」は「繰り返す」、「spect」は「見る」、すなわち“見つめ続ける”ということです。

とかく私たちは、“分かりやすい・分かりにくい”、“好き・嫌い”、“向く・向かない”と頭で判断してしまいがちですが、子どもたちのことを信じて、見つめ続けて、心で理解しようと努めていくと、やがて子どもたちにも通じ、豊かな関係性、信頼関係が構築されていきます。そのときに初めて、子どもたちの学びに向かう姿勢ができてくるのではないかと思います。今、やっていることが子どもたちに浸透するまでには、時間がかかるのです。

4

いろいろな研修の仕組みを模索する！ ～授業力を上げるには?!～

渡辺 さて、これまで伺ってきたような内容で、早稲田アカデミーは公教育との協働・コラボレーションで、若手教師育成等の研修をされています。そうした研修を通しての気づきを教えてください。

公教育との協働研修での気づきは？

牛嶋 公教育の現場で若手教師を育成する時間がなかなか取りにくい状況下で、管理職等の理解と協力があって、民間の研修ノウハウを取り入れ役立てていただいていることです。「塾で若い学生が堂々と子どもたちの前に立って授業をしている。子どもたちの前に教師として立つ、という点では学校でも塾でも共通しているところがありますね。」というような言葉を教育委員会の方や、若手教師指導に携わる校長先生との対話の中でいただいたのがとても印象に残っています。

それから、共通言語をもつことの大切さを実感しました。私たちの研修映像を媒介にして、学校現場で組織的な学習として、管理職や指導教諭が各々にもっている「暗黙知」の「形式知」化が進み、「共通言語」による世代間ギャップの解消や若手教師との対話の深まりにもつながっていることが、1年次（初任者等）研修時に提出され

た受講レポートの記載内容や、学校長へのヒアリング等から伺えたからです。

集団指導だけでなく、少人数指導、特別支援指導等、様々なかたちで、子ども一人ひとりの成長を温かい眼差しをもって日々見守っている姿にも感銘を受けました。学級（クラス）として子どもたちを導きつつ、子ども一人ひとりの個性を大切にするという考え方は、塾での指導の中でも大切にしていかなければならないと実感しました。

渡辺 授業力を上げるために、他にヒントになるようなことはありますか。

牛嶋 子どもの視点から自身の授業を見直す目を養う、ということに尽きるように思います。

「見てもらう」「見に行く」「自分の姿を見る」

1 勇気をもって自分の授業を「見てもらう」

いろいろ指摘を受けると、叱られているようで、びくびくしがちです。でも、どこが良い、悪いは自分で判断することが難しいので、まずはアドバイスをもらいましょう。



2 人の授業を「見に行く」

授業を見る機会を見つけられなかったら、管理職等に紹介してもらうなどして、先輩の授業を見に行くことです。そこで、先輩から指導のコツを覚えてもらって、モチベーションを上げられることもよくあります。



3 「自分の姿を見る」

これが最も重要で効果的です。自分の授業の良い点や改善点を確認し、客観視できるようになることが大切です。



世代間ギャップを埋める、校内研修の“すゝめ”

渡辺 校内研修が世代間ギャップの解消にもつながるといってお話をもう少しお聞かせください。

牛嶋 校内研修は、基本的には若手教師の育成という設定で取り組むのがよいと思います。そのときに、中堅、ベテランの先生もよいフィードバックができるように、その研修に積極的に関わって学び直し、“学びほくし”をすることが校内研修の充実につながると思います。

子どもたちも時代とともに変わってきています。若い教師が悩みながらも生き生きと子どもたちと接している姿に我が身を重ねてみることで、新たな気づきや学びにつながることも多くあるようです。

渡辺 ありがとうございます。それでは最後に、公教育との協働を通して、小学校現場の研修に対するアドバイスがあれば、ぜひお願いしたいと思います。

子どもとの対話の状況を見合う

牛嶋 普段から校内で授業を相互に見合うとか、保護者に開放するとか、授業をいつ見られてもよい状況をつくるとよいと思います。そしてそこで、何をいっばん見合うかという、授業そのものよりも、子どもと先生との対話、キャッチボールです。

先生が発問すると、子どもたちが予想外の反応をする場合が往々にしてあります。このときどう対応するかです。私は、責任をもってその反応を受け取らねばならないと考えています。これを「発問責任」と呼んでいます。とかく若い先生は、発問に期待していない反応が返ってくると、スルーしたり、「うん？」という顔をしたりします。そういう経験をした子どもは当然、その後の先生の発問への反応が鈍くなります。こうしたことを学校や校内研修で教えてほしいと思います。

校内研修や研究授業は良かったところは言いますが、“ここは課題だ！”と言うことはなかなか難しいですね。ですが、その授業での先生と子どもの対話の状況を前向きに検討し合うというスタンスで高め合えるとよいと思います。

eラーニング教材「教師力養成塾e-講座」

1単元5分で学べる、授業が変わる！

e-講座で子どもの意欲と学びを高めよう！



e-講座では、教科を問わず必要となる基本的な授業技術として、授業基本動作「発声・正対・視線等」と、指導基本スキル「指示・板書・説明等」を、インターネット環境があれば、いつでも、どこでも、視覚的に学べます。意識するだけでも子どもの反応は変わります。e-講座で効率的にポイントを押さえ、授業づくりに活かしてください。



※保護者対応や課題映像なども視聴可能です。

	取り扱うテーマ	映像時間
第1講座	①挨拶 ②視線 ③単指示	7本・計23分
第2講座	①聴く姿勢 ②熱意 ③約束	7本・計18分
第3講座	①目標(めあて) ②板書 ③宿題	7本・計22分
第4講座	①発問 ②動機付け ③やる気の維持	9本・計34分

早稲田アカデミー、教師力養成塾e-講座 <http://youseijuku.jp/>



牛嶋さんから 若手の先生方への メッセージ



あなたたちには、もう一つの仕事がある。
それは、“成長する”ということです。

牛嶋 教師には、使命感というか、一人ひとりにとっての理想像や覚悟が必要だと思います。しかし教師には、それだけの「見返り」「得るもの」が必ずあるはずですよ。

教師の仕事は、“次代を担う子どもたちを育成する。”と言いますが、そのことが、まさに自分自身の生きる力や喜びにつながっていくのだと思います。

子どもたちに、自尊感情や自己肯定感をもたせることが大事だと言いますが、そのためには、教師自身が元気でなければいけない。そして、自分自身をちゃんと受け止めて、まだまだ伸びる、まだまだできるというように、自分を本当に尊重してほしい。将来の自分に期待してほしいと思います。

最初のうちは、分からないことや困ることはたくさんあって当然なので、恥ずかしがらずに言葉に出して、先輩や管理職、ときには保護者など、周りのいろんな人の力を借りながら、成長していきましょう。

牛嶋 先生になって子どもたちと向き合いスタートが切れてから、1年目2年目3年目と続けて、その中で得てきたことを次の者（後輩となる先生）に渡す（Pay It Forward）という感覚がもてるとよいと思います。それは、つながりや絆に通じることです。

教師は、頑張ったら頑張った分だけ感謝される。こんな素晴らしい仕事はありません。でも、その頑張りは、“自分は頑張っているぞ！”という自己評価ではなくて、子どもや保護者から見てもらって初めて“頑張った。”となるわけです。

だから、“頑張っているでしょ。”というアピールではなくて、“子どもたちが頑張っているのは先生のおかげです。”と言ってもらってこそ、本当に頑張っているといえるのだと思います。できると思うことを一生懸命やり続けてください。そうするときと全部返ってきます。

初任の先生におススメの振り返り方

ちょうど今から1年前の自分に、
どんなことを教えてあげたいですか？

何でも聞いてみるもんだったな。



- 成長した点
- 課題解決のポイント等
気づいた点を書き出してみる。

「子どもたちは教師の写し鏡」の意味

子どもたちにまねされてもいいように、“先生はびしっとしなさい！”という意味合いではありません。“子どもたちの成長の中に、自分の成長を見いだせるではないですか、こんな素敵なことはないですよ。”という意味です。

